

普陀山での一日目の終わりは、この島で一番大きい「普済寺」観光である。例の黄色いマイクロバスに全員乗り込んだ。普済寺は、1080年北宋時代(960年～1126年)に創建されたというから千年近い歴史を持っている。広大な寺領を黄色に塗られた塀が取り囲んでいる。

がっしりした山門から中に入ると、境内は広く、本堂の周囲には樹齢数百年と思われる樟樹(クスノキ)が幾本も建物全体を覆うように枝を広げている。円通宝殿と呼ばれる本堂が埋もれているようにさえ見える。本堂の正面の石段下には大きな香炉があり、存在感を示すべく濛々と線香の煙を吐き出している。中に入ると大きな仏像が鎮座している。観音菩薩である。中国各地の寺院で見られるカラフルな仏像と異なり、金色一色で荘厳な感じがする。この普済寺は、後述する「法雨寺」、「慧済寺」と共に「普陀三大寺」の筆頭に数えられる。

友人達はここでもあちこちで三拝九拝している。私はあきれて先に山門を出る。前面にかなり大きな蓮池が広がっている。池の周囲を巡ることが出来るように散歩道が続いている。池の半分は蓮の葉が重なり合うように水面を覆っている。さすがにもうすぐ10月なので花は咲いていないが、蓮の葉をじっと見ていると、以前にも「揚州市」のところで書いたことがある朱自清の「荷塘月色」の散文



樟樹(クスノキ)に覆われた普済寺



陀山東南端の断崖

を思い出す。昼間なので月は出ていないが、夜の光景が脳裏に浮かんで来る。美しい蓮の花は、北京の公園や西湖をはじめ中国各地で見てきたが、牡丹の花はまだ一度もお目にかかったことがない。中国の国花は牡丹より静寂なイメージの蓮の花がいいのではという考えが頭をよぎった。

夕闇が迫ってきて、皆またマイクロバスに乗って出発した。5分もしない内にバスは停まってそこで解散となった。友人に我々のホテルを聞くとバスが停まったすぐ前にある建物だと言う。そこには正面玄関に、「普陀山銀雲山莊」と書かれた小奇麗で古風な感じの瓦屋根風の2階建ホテルがあった。

私は大きなビルの高級ホテルよりこのようなホテルが好きだ。小奇麗なもの気に入った。部屋は1階にあり少し休んで夕方7時ころにホテル内のレストランに集合となった。レストランには中庭があり、円形のテーブルがいくつか置かれていた。4人はそこに座ってビールで乾杯となった。空を見上げれば星が瞬き始めている。皆今日一日の長旅の平穩を喜び合った。このような時間も旅の一つの大きな楽しみである。明朝は朝6時にホテルの近くに集合となっているので早めに休むことにした。殆どの参加者は一泊して帰るらしく、朝早くから廻らなければ1日では見切れないためのようだ。

二日目の朝を迎えた。今日も晴れて気持ちがいい。朝5時半に起床し、顔を洗って集合場所に行っ



日本に行かなかった観音様が祀ってある不肯去観音院

た。すると居るのはガイドだけである。ガイドがいるのだから集合場所を間違えたわけではない。10分くらい経って一人二人と集まり始めた。我々を見ても急ぐ様子はない。遅れて申しわけないという気持ちは見てとれない。結局全員が集まったのは6時20分を廻ったところである。やはり中国人は一般的に時間にルーズのようだ。遅れて来ても「不好意思(すみません)」の一言もない。そうではない中国人も少なからずいるが、私は中国で何度もこのような場面に遭遇した。きちんとされている方には申し訳ないが、あえて書かせていただいた。

さて今日は、まず「不肯去観音院」にマイクロバスは向かった。不肯去観音院については前号で名前の由来だけを記したが、以下のことを付記したい。この寺院は複雑な断崖が続く岬の突端に鎮座している。境内の一角に、観音様を日本に運ぼうとした船が行く手を遮られ急遽避難した場所とのいわれがある「潮音洞」がある。切り立った狭い入り江に波が打ち付けている。船はここに避難して、観音様を下ろしたあと日本に向かって行ったということか。

不肯去観音院が名前の由来だけでなく、印象に残ったのは日本のいくつかの寺院との繋がりである。実はこの寺院は普陀山内で一番の歴史を持つのであるが、現在の仏殿は1980年に新たに建てられたものである。その時に日本の寺院が資金協力したそうである。観音院に向かって左側に回廊があり、そこに小さな観音様がズラリと置かれている。それぞれの像には寄進した寺院の名と

その時の住職の名と説明文が表示してある。その中の「千光寺」に私の目が止まった。尾道市の千光寺である。私は広島生まれなのでこの寺に何度か足を運んだ。普陀山まで来て故郷との繋がりがあろうとは思ってもよらなかった。説明文の最後に住職・多田某と書かれていた。帰国してから調べたがこのあたりの事情はよくわからない。二日目のスタートはうれしい気持ちで始まった。

次にガイドが案内したのは「南海観音」である。皆ガイドの後をゾロゾロついていく。海沿いの道は木々が繁っていて空気も新鮮である。そのうちに上の方に南海観音と書いてある牌楼が見えてきた。そこで入場券を買って中に入る。緩やかな坂道を登って行くと急に開けたところに出た。ここにも大きな牌楼がありその奥に巨大な観音像が屹立していた。金色に輝く立像は高さ33メートルもあるそうだ。例によってここでも観光客は、額に長い線香をかざして四方にお祈りをしていた。石段を登り、観音像のそばによると流石に大きく威圧感がある。観音霊場と呼ばれる普陀山の象徴である。この場所から海を一望でき、その光景は素晴らしい一言である。西方浄土に向かって立っているこの観音像は1997年の建立である。

観音様に手を合わせた後、もとの場所に戻りまたマイクロバスに乗り込んで「法雨寺」に向かった。普陀山で二番目に大きな寺院で明代の1580年の創建である。その後理由は分からないが清代の1699年に再建されている。それでも3百年以上前の建物だ。中に入ると大きな側壁があり、竜の素晴らしい彫刻が彫られている。さらに進むと3～4mの高さの尖塔のような法塔が二つ置かれていて、上部は穴がけられておりそこに向けて硬貨を投げ入れている人が群がっていた。うまく乗っかるとご利益があるのであろう。この寺院は後述する仏頂山の山麓にあるからか、斜面に沿って階段状にいくつかの立派な寺院が建てられている。中国を旅すると、どうして重機のない時代、山頂にかくも広大な寺院を作り上げたのか、と感心するところが多い。ここは低い山ではあるが日本では

あまり見られない光景である。中国人のエネルギーの底知れなさが感じられる。

山門を出ると友人が「我々を除く人たちは今日の午後バスで上海に帰るのでここから別行動になる」という。我々はもう一泊するのでゆったりできるのだ。まず腹ごしらえということで近くのレストランに入った。メニューに揚州チャーハンがあったので早速注文した。上海の揚州飯店で食べそびれたがようやく実現した。あの店のものとは違っても美味しかった。

午後はすぐ近くに登山口がある「仏頂山」に登ることにした。普陀山の最高峰である仏頂山は高さが約290mしかないが、麓から頂上まで千段余りの石段が続いている。我々は森林浴をしながら一步一步石段を登った。すると前方に日本の袈裟のような服を着た数人が、3段石段を登ってはそこで跪き五体投地のようにして祈り、また3段登って同じように祈る動作を繰り返しながら登っている。またしばらくすると同じような人たちを見た。普陀山はやはり信仰の地なのだ、という感じがする。そういえばこの島にはゴミがあまり見当たらない。すくなくとも信者はこの聖なる島を汚したくないのではないか。「三步一拝」を繰り返す信者を追い抜きながらようやく頂上に着いた。頂上の広場には「仏頂山」と刻まれた大きな石があり、そこでお互いに記念撮影。そこからすこし下ったところに普陀三大寺の残りのひとつ、「慧濟寺」がある。ガイドブックによれば、明代に園慧という僧がこの地に建てたとある。普陀山に来られた方はこの普陀三大寺はそれぞれ趣があり、必見である。

頂上にある土産物店をのぞいた後、下りは別のルートにした。途中、巨大な岩に「心」の文字を刻んだ「心字石」や「海天仏国」と彫られた岩を見なが

ら麓に下りた。そこに標識が立っていて矢印で「千歩沙」(沙は砂の意)の方向が表示してある。地図で見ると島の東側にある長い砂浜である。どのよう



普陀山三大寺院のひとつ法雨寺

な海辺か見に行くことにした。浜に来てみると、きめの細かな砂浜がゆるやかな曲線を描きながらかなり遠方まで続いている。しかもゴミひとつ落ちておらずとにかく美しい。海沿いに皆で歩いてみた。私はこの浜の沖合をその昔、遣唐使を乗せた船が何艘も決死の思いで通り過ぎたのではなかろうかと思った。遣唐使の主要航路の港である「寧波」はここから近いのである。(前号の地図を参照ください) 水平線の彼方は日本である。「揚州市」で書いた鑑真と阿

倍仲麻呂を思い浮かべた。

夕暮れ時が近くなった。友人に「どこかに郵便局があるか訊いて欲しい」と言うのですぐ調べてくれた。普濟寺の近くにこの島唯一の郵便局があるので、またマイクロバスに乗って普濟寺に向かった。先ほどの山門の前を通り過ぎると郵便局が見えてきた。私はここで海外から時々絵葉書を送っていただくUさんとKさんに送ることにした。いくつかの種類があったが美しい磐陀石の絵葉書を選んだ。郵便局員から切手を購入し、手渡した。この絵葉書は私の家とUさんの家には約3週間かかって届いた。おそらくすぐ国慶節休暇が始まるので時間がかかったのかもしれない。しかしKさん宅には未だに着かない。どこをさまよっているのだろうか。

普陀山の旅は終わりに近づいた。郵便局から4人でゆったりと散策しながらホテルに向かった。小さな島なのでもうおおよその方角は分かってきた。夜の帳が下りてきた。明朝は5時起床だと言うので皆で夕食を摂ったあと、早めに床に就いた。

(続く)